

球、後頭葉等の血流低下を認めた。対照群との比較では、解離性障害群にて小脳半球の血流低下が有意であった。以上より、解離性障害が中枢神経系の何らかの機能異常と関係する可能性が示唆され、同時に特徴的な脳血流低下パターンより、客観的な診断方法、鑑別診断としてのSPECTの有用性が示唆された。

9. CNS ループスの^{99m}Tc-ECD脳血流SPECT

菊川 薫 外山 宏 古賀 佑彦
(藤田保衛大・放)
片山 雅夫 鳥飼 勝隆
(同・感染症リウマチ内)
西村 哲浩 加藤 正基 (同・病院放部)
江尻 和隆 前田 寿登 仙田 宏平
竹内 昭 (同・衛生学部診療放)

SLEの経過中に精神症状を呈することは、しばしば認められるが、その有力な診断法はない。われわれは、CNSループスを疑った症例に^{99m}Tc-ECD SPECTの早期像、後期像を施行し、その臨床的意義について検討した。対象は、SLEにて、治療経過中の、15症例(CNS群5人、非CNS群10人)で、SPECTにて得られた画像を、4Typeに分類し、比較検討した。CNS群の方が陽性率が高かったが、非CNS群は後期像で前頭葉内側の集積の低下を認めた例を含むと、陽性率は上昇した。前頭葉の内側は、SLE症例の大脳皮質で最も脆弱な部位である可能性があり、ECD SPECTの後期像の有用性が示唆された。

10. 心電図同期^{99m}Tc心筋血流SPECTにおける左室容積値、駆出率自動算出の検討 ——健常人における評価——

木下 佳美 祖父江亮嗣 大河内幸子
岡野 美穂 伊藤 雅人 南部 一郎
三村三喜男 (名古屋第二赤十字病院・放)
七里 守 平山 治雄 (同・循内)
遠山 淳子 大場 覚 (名市大・放)

Quantitative Gated SPECT (QGS) について健常人による評価を行った。[対象] 健常人ボランティア8名。

[方法] テトロホスミン 600 MBq ボーラス静注し、first passの収集を行った。1.5時間後に心電図同期心筋SPECTの収集(L字型180°収集と対向型360°収集)を行った。心エコーはTeichholz法にてLVEFを算出した。[結果] EDV、LVEFはL字型で対向型に比べやや低値に算出された。LVEFはL字型、対向型ともにfirst passと相関し、L字型で心エコーと相関した。血流像、局所EF、壁運動、壁肥厚のブルズアイの画像の平均画像を作成した。局所EF、壁運動は中隔側で低下し、壁肥厚では心基部側で低下していた。

11. ^{99m}Tc-MIBIを用いた局所心筋血流量定量

土田 龍郎 高橋 範雄 楊 景涛
山本 和高 石井 靖 (福井医大・放)
定藤 規弘 米倉 義晴 (同・高エネ)
中野 顕 (同・一内)

^{99m}Tc-MIBI (MIBI)の持続静注とDynamic SPECTにより局所心筋血流量の定量化を試みた。MIBI 740 MBq (20 mCi)を20 mlに希釈し、シリンジポンプにて持続静注を行うと同時に、Dynamic SPECTを撮像した。Patlak plotにて解析を行い、心筋へのinflux constant (Ku)を求めた。これを¹⁵N-NH₃による局所心筋血流量(F)と比較したところ、KuとFの間には $Ku = 0.057 + 0.220F$, $r = 0.83$ と良好な相関が得られ、MIBIの持続静注とDynamic SPECTを用いた局所心筋血流量定量の可能性が示唆された。

12. ¹²³I心筋製剤を用いたファーストパス法による安静時心機能評価

清水 正司 藤山 昌成 豊嶋心一郎
富澤 岳人 亀田 圭介 金澤 貴
渡辺 直人 瀬戸 光 (富山医薬大・放)

[目的] ¹²³I心筋製剤を用いたファーストパス法による安静時心機能評価。[対象] 1週間以内に^{99m}Tcと¹²³Iの両方のファーストパス法を施行された虚血性心疾患の患者28例。[方法] 多結晶ガンマカメラSIM400に高感度コリメータを装着し、エネルギーウィンド幅は135-180 keV、カットオフ値は約10%とした。¹²³I-MIBG・BMIPPは111-148 MBq (3-4 mCi)を使用した。[結果] ^{99m}Tcに比べ、¹²³IによるLVEF値は約10%